



フランス人のアングロ・サクソン化現象？

「アングロ・サクソン経済」という言葉そのものが、フランス流ビジネスとの対比から生まれたと言っても過言ではない。そもそも歴史を辿ればアングロ・サクソン人は元々ゲルマンの地から来た人々で、フランス以外の欧州諸国では英語圏への対抗意識は取り立てて強くはない。本来「アングロ・サクソン経済」には、米国、オーストラリア、カナダ、ニュージーランド、アイルランドなど英語圏の主要国が含まれてしかるべきだが、フランス人にとっての「アングロ・サクソン」は英国を意味する。フランス人が米国について話す時は「アメリカ」と言い、「アングロ・サクソン」と言ったときはイングランドを指すのである。彼らにとってイングランドは古くからの宿敵であり、戦いを交えた回数ほどのライバル国よりも多い。過去に両国は互いの国土を侵略したが、その影響は現在にまで及んでいる。フランスで不動産を購入して住みついているイギリス人家族が多くいることは両国で周知の事実であり、この現象を伝える書籍やテレビ番組も数多い。一方、余り知られていないことだが、イギリスに住んで働くフランス人もこれと同水準、情報源によってはそれ以上いると言われている。その数は約20万人で、サルコジ大統領はこれを「頭脳流出」と見なし、母国救済のため帰国を呼びかけた。

最近フランスが直面しているのは、伝統的なフランス流よりもアングロ・サクソン流が上手いという事実である。この事実を受け、フランス人のアングロ・サクソン化が進んでいる。過去においては英語の浸透を毛嫌いしたものだが、今ではとくにビジネスの場面で英語が溢れている。「チャレンジ」、「デザイン」、「マネジメント」はまともな外来語として定着した。可能な限り自宅に戻ってランチに1、2時間かけていたのは昔の話で、今ではオフィスの机でサンドイッチをつまんでいる。民族的には正統フランス人ではない親米の大統領を選出したが、この大統領は、健康志向を含め、ダイナミックなアングロ・サクソン型アプローチを体現しているように見受けられる。従来政治家のプライベートに対しては慎重に口を閉ざしていたフランスの新聞だが、今では一転してあらゆるゴシップを追いかける「プレス・ピープル（記者注：扇情的なタブロイド記者たち）」と化した。英国と同様、フランス経済でも製造業が衰退し、代わってサービスと金融の比重が上がっている。いつの時点でフランス人は、嫌々ながらもアングロ・サクソン化する運命を受入れたのだろうか。有望視されていた2012年オリンピック開催地競争でパリが敗れた時の落胆ぶりに表れていたのだろうか。それは単にがっかりしたといったレベルではなく、まさに衝撃であった。というのも、パリを破って五輪開催地に選ばれたのは他でもないロンドンだったのだから。

執筆：David Schaefer

問合せ（日本語訳）：井上貴子(tinoue@komatsuresearch.com)